



## 北尾トロさん

1958年、福岡市生まれ。インド旅行から戻ったら追試が終わっていたという理由で、5年かかって大学を卒業。フリーター、編集プロダクションのアルバイトを経て、26歳でフリーライターに。30歳を前にバンド活動、同名の“脳天気商会”という会社をライター・下関マグロ氏たちと設立。同時期に北尾トロのペンネームで『別冊宝島』『裏モノの本』などに執筆し始める。1999年、インターネットを使った古本屋『杉並北尾堂』をオープン。個人事務所(株)ランブリン代表。NPO法人西荻コム理事長。西荻ブックマークスタッフ。著書に「裁判長！ここは懲役4年かどうか」(文春文庫)などがある。

### 杉並に住み始めたきっかけ

僕は父親の仕事の都合で各地を転々としていまして、東京には高校2年から住み始めたんです。はじめて杉並区に住んだのは30年くらい前になるのかな。大学が法政大学だったのでキャンパスが市ヶ谷、となると中央線沿線の阿佐ヶ谷あたりが便利だというのが理由ですね。その後高円寺、吉祥寺に住んで、いったん小田急線沿線の経堂へ。20年くらい前のことですね。その後また中央線に戻ってきて再び阿佐ヶ谷、高円寺、という感じですね。西荻は結婚したことをきっかけに住みはじめました。

### 西荻という街の魅力

中央線沿線にずっと住んでいたのに、西荻だけはなぜか縁がなかったんですね。西荻って個人商店が元気なんですよ。八百屋とか魚屋とかも、人口の割には多いと思います。個人商店で買った方がスーパーで買うより品物もいいし、調理の仕方なんてのも教えてくれますよね。僕はもともと買い物をするタイプではないのですが、身の回りのものはだいたい西荻で買ってますね。僕自身が一番足を運ぶのは本屋かな。西荻は本屋、古本屋が多いこともありよく利用していますね。あと街の喫茶店も多い。僕が学生の頃からあるようなね。そう「Cafe」じゃなくて「喫茶店」ですよ。西荻はスターバックス、TSUTAYAとか、ちょっとしたほかの街にあるチェーン店がないんです。よその町だと喫茶店はどんどん減っていくのですが、西荻はチェーン店が入れない街なんだよね。たぶん商圈として中途半端なのだと思います。吉野屋、マクドナルド、ドトールくらいはありますが、ほかにチェーン店、あるかなあ。なにしろケンタッキーがなくなってしまった街なので。だから西荻は個人商店街が、がんばれる街だと思います。

僕にとってそれは「居心地が良い街」となるわけです。

### ライターからノンフィクション作家へ

最初は編集プロダクションでアルバイトしていたのですが、半年でやめました。当時、知り合いのライターの友人宅に居候していたんです。そこで「おい、暇だったら手伝ってくれよ」なんていわれて名刺なんて作って。それからですね。でも友人に彼女ができて「悪いけど出ていってくれ」って(笑)。困ったなど。それで親に借金して、吉祥寺にアパート借りて本格的にフリーライターの仕事をやりはじめました。それが1984年ごろかな。最初はスキーとかスポーツ雑誌やってました。海外取材も多かったですね。30歳過ぎた頃からノンフィクションをやりはじめました。僕は競馬が好きだったので競馬界の裏で働く人たちの取材してまとめた本出そう、と。それで馬の調教師や馬の世話する人たちに手紙書いて電話して、取材しました。皆それぞれ忙しいわけですからね。僕も彼らの話を一言も聞きもらすまいと力が入りました。が、めでたく本になったものの、これが全く売れませんでした(笑)。でも色々な人たちから話を聞き、自分なりに手応えを感じたんです。それをきっかけに「書く仕事」が楽しいと思うようになりました。主に雑誌の仕事も多くやりましたね。「別冊宝島」に執筆するようになったり、「ダ・ヴィンチ」は創刊の時から携わってます。

### 杉並北尾堂オープン

僕は本が好きなんですよね。それも珍しい本やサブカルチャー本。すぐ買ってしまおうんです。でもいつの間か

どんどん増えていってしまっ…。杉並区の中でもあちこち引越をした方なので、それなりに物は処分してきたのですが本だけは大事にしていました。ところがある日、それらの本を眺めているうちに「こんなにたくさん本があるんだ！」とがく然としまして（笑）でも捨てるのはもったいない。「待てよ、だれかこの本が欲しい人がいるかもしれない」ということで、インディーズ出版活動を始めて『廃本研究』を制作しました。実はこれに結構はまりましたね。それで1999年、インターネットを使った古本屋『杉並北尾堂』をオープンさせました。だいたいサブカルチャー本なので、関係ない人にとっては全く役に立たない内容なのですが、こういうのが好きな人たちって何か通じるものがあるんです。買ってくれる人たちと、あれこれやりとりするのが楽しいですね。

杉並北尾堂のオープンがきっかけで、期間限定のブックカフェ、古書イベントなどもやるようになりました。

## 書きたい人が集まった西荻井

西荻井はタウンペーパーですが、これは書きたいという人たちが成り立っている本です。いかに古株が幅をきかせないかというのが大切。後で入ってきた素人っぽい人になるべくやってもらい、新陳代謝を盛んにしたいと思っています。

それと西荻井が出ると、本屋、広告出してくれたところにはだいたいスタッフが届けにいきます。

広告は最初はおつきあいでした。

「広告を見てお客さんがくると思えないけれど、あんた時々店にくるしね」みたいな（笑）。

それが認知されるにつれて申し込みが増え、今では順番待ちの状況となっています。

## ホームタウンのような街

西荻は僕にとってホームタウンのような街ですね。中央線に乗って西荻に着くと「帰ってきた」という気持ちになります。西荻から離れたくないんですよ。20年前だったら都心にいることに価値がありましたが、今はメールもあるし、どうしても僕に会いたければ西荻まできてくれるだろうと思ってます。

都心にいるよりも、気に入った場所で余裕を持って仕事をしていた方が楽な気がします。西荻にいれば外からの影響

がそんなにダイレクトにこないような気がするんです。これが新宿とかだと、ワサワサしちゃって。西荻にいると好きなことやってていいんじゃないか、という気になってしまふんですね。

僕の仕事にとっては杉並、特に西荻はベストポジションだと思います。実際に漫画家、編集者も多く住んでいますしね。

西荻って何かがあるとすごくなじめる街だと思います。たとえばお酒が好きだったらなじみの店ができて、それから人間関係が広がっていく。僕は古本屋から人間関係が広がっていきました。ただ仕事で都心に通って、西荻は帰って寝るだけだったらそうはならないのかもしれない。

西荻は初めての人にとって敷居の高さを感じる街、常連が幅をきかせている街という印象を受ける人もいますが、とても良いところなのでその魅力をもっと知って欲しいですね。

取材を終えて

北尾さんといえば著書「裁判長！ここは懲役4年でどうすか」で著名なベストセラー作家だという印象があった。しかし実際にお会いした北尾さんは、そんな著名な作家であるということを忘れてしまうほど、とても気さくな方である。彼は「こんなこと知ってても何も役に立たないんだけど」といっつも楽しくお話をしてくださった。関係ない人には「そんなことどうでもいいじゃん！」となる話も、北尾さんの言葉になるとつい引きこまれてしまう。彼は根っからの「サブカルチャー派」なのだと思う。

「僕は西荻をホームタウンだと思っているんですよ。あちこち転々とした身としてはホームタウンがやっと見つかったという気持ちですね」とおっしゃっていた言葉が印象的だった。

まだまだ成長中の「西荻井」。街の人、若い人たちを巻きこみ、北尾さんのまわりではまだまだ楽しいことが続きそうだ。

—取材・執筆：高橋 貴子、撮影：NPO 法人チューニング・フォー・ザ・フューチャー（取材・2010年11月15日 掲載・2011年3月3日）—